# 文人の俳句

俳句シリーズ

人と作品

村山古郷 著

村山古郷著

# 俳句シリーズ 人と作品 14

桜楓社

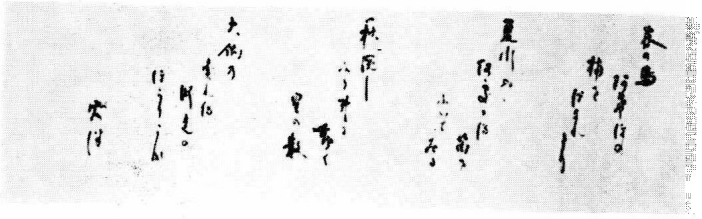
俳句シリーズ　文人の俳句　人と作品 14

昭和四十一年十月五日　印刷
昭和四十一年十月十日　発行

定価　六八〇円

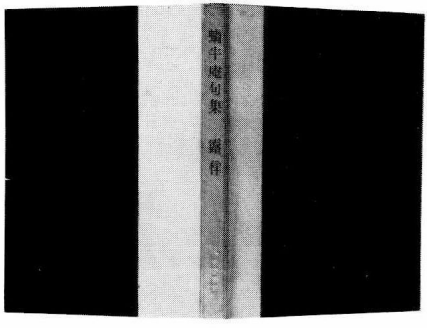
著者　村山古郷
発行者　南雲克雄
印刷者　株式会社太平印刷社

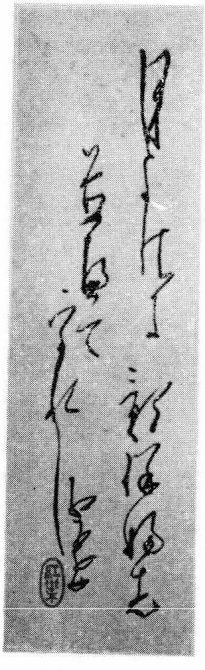
発行所　株式会社　桜楓社
東京都千代田区神田猿楽町二の五
電話（二九一）五六六〇―二



幸田露伴筆蹟

「蝸牛庵句集」幸田露伴著（昭和24年8月刊）



「紅葉句帳」星野麦人編（明治40年4月刊）

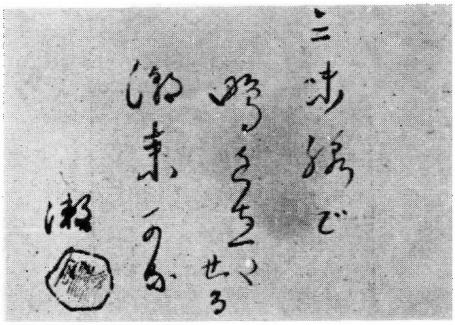
尾崎紅葉筆蹟

月よさに並べてうれし影ほふし　紅葉

森鷗外が明治二十九年一月に創刊した雑誌「めざまし草の表紙」。評論を主としたが、詩歌俳句の紹介もあり、鷗外自身の俳句もこれに発表された。

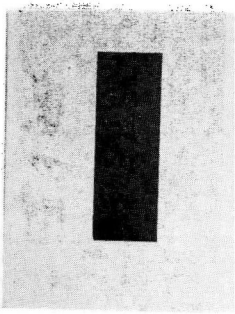
夏目漱石筆蹟　送別　御立ちやるか御立ちあれ新酒菊の花　漱石

泉鏡花筆蹟　秋の雲尾上のすすき見ゆるなり　鏡花

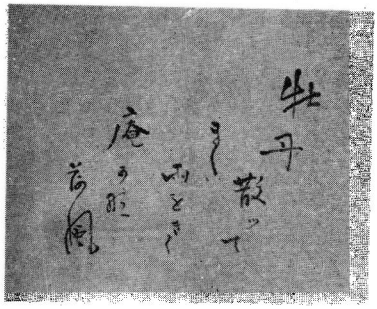


三味線で鳴を立たせる潮来かな　漱石

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

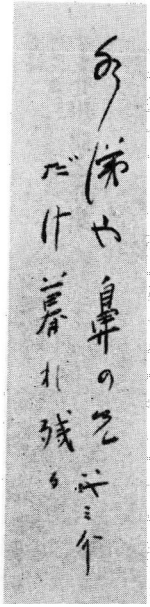


「荷風句集」(昭和23年２月刊)



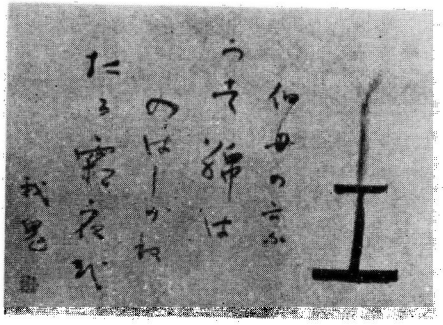
荷風筆蹟　牡丹散ッてまた雨となる庵かな

荷風



芥川竜之介筆蹟

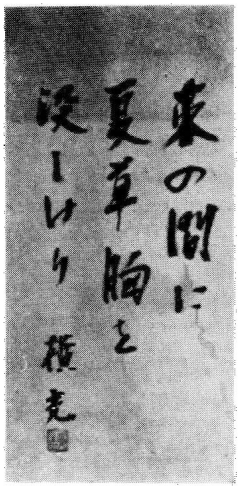
水涕や鼻の先だけ暮れ残る　竜之介



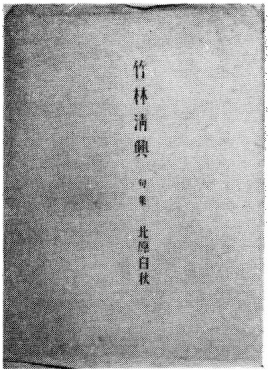
芥川竜之介自画賛

伯母の云う

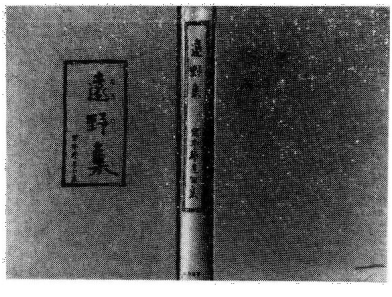
うす綿はのばしかねたる霜夜哉　我鬼

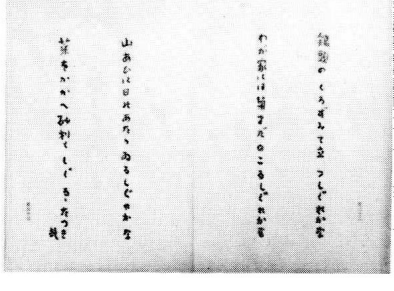



横光利一筆蹟　束の間に夏草胸を没しけり　横光




北原白秋句集「竹林清興」（昭和22年4月）



室生犀星句集「遠野集」（昭和34年2月刊）
「遠野集」の内容　全句著者の自筆を凸版で出している

三好達治筆蹟
稀れに木の葉の飛ぶ
さへや久しき時を弄ぶ　達治

# 目

# 次

幸田露伴の俳句……七
尾崎紅葉の俳句……二七
森鷗外の俳句……五〇
夏目漱石の俳句……七三
泉鏡花の俳句……九八
永井荷風の俳句……一二五
芥川竜之介の俳句……一三三
横光利一の俳句……一五一
北原白秋の俳句……一六九
室生犀星の俳句……一八六

三好達治の俳句……二〇五
中　勘助の俳句……二二五
参考文献……二四三
あとがき……二五三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook

# 文人の俳句

# 幸田露伴の俳句

「一世の文豪、碩学、大通」とは、幸田露伴を仰望した辰野隆の言葉である。明治、大正、昭和の三代に亘る露伴の業績については、今更喋々するまでもないが、露伴の名を不朽に止める小説、随筆、史伝等の文業の他に、尚逸すべからざるものに阿部次郎、小宮豊隆、和辻哲郎らと共同の「芭蕉俳句研究」並び露伴が半生を労した七部集の評釈がある。

七部集評釈は、小林勇の「蝸牛庵訪問記」によれば「大正十三年から途中とぎれたとはいえ二十四年の歳月がたつ」て完成したものであるが、筑摩書房刊「幸田露伴集」の年譜には、大正九年五十四才で著手したとある。何れが正しいか詳かでないが、晩年の大半を専らこれに当

てた労作であることはまちがいなく、特に最終の部は病床に苦しい口述を続けて、歿する四カ月前、即ち昭和二十二年三月のはじめに、漸く完成したものである。このように露伴と俳諧の縁は深い。その露伴に、俳句作品があるといっても、決して不思議なことではあるまい。

新潮社発行の「日本文学大辞典」には、「幸田露伴の小説以外に於ける業績」として、

一、随筆、論文
二、史伝文学
三、紀　行
四、戯　曲
五、新体詩
六、俳書評註

の六項目を挙げている。

新体詩については、新潮文庫に「幸田露伴詩集」があり、その業績が一本に纒められているから、小説以外の業績と認めることにもとより異存はないが、ここには俳句が挙げられていない。俳句はとりあげるほどでもない余技であるというのかも知れないが、すくなくとも第六項の「俳書評註」に「及び俳句」を追加しておくべきであったろう。

## 二

露伴には、歿後、蝸牛会から出版された「蝸牛庵句集」がある。中央公論社の発行にかかる。後記には「この蝸牛庵句集に収められた作品三百六十句」とあるが、私の調べたところでは三百五十二句である。その内にも、下五の「膝の皿」だけがあって、「上半、作者の記憶を逸す」というのが一句、附句が二句ずつ三組合計六句あって、それを差し引くと、完全な俳句形式をもったものは三百四十五句ということになる。

その後、昭和二十八年六月号の「俳句」に「蝸牛庵句集補遺」として鹽谷贊が紹介した三十四句がある。しかし、この内には句集に収められた句と重複するのが二句、附句が五句あり、それを差し引くと、俳句として二十七句の追加発表ということになり、句集と合わせて三百七十二句である。その他「蝸牛庵訪問記」の中に、前記の何れにも洩れているのが一句あり、更に今後もそういう脱漏が追加されるものと思われるが、今のところ私の手許で判っている露伴俳句の全部は、三百七十三句である。

句集の巻頭にある

里遠しいざ露と寝ん草まくら

は、明治二十年九月、露伴の数え年二十一才の時の作である。この頃から句作をはじめて、昭

和二十一年の歿前年まで約六十年間の作句数が三百七十数句であり、数においてはやや乏しい恨みはあるにしても、一代の達人が折にふれて作りなした句のかずかずは、それぞれに珍重愛誦すべきものというべきであろう。

三

「里遠しいざ露と寝ん草まくらとは一歳陸奥の独り旅、夜更て野末に疲れたる時の吟」とは、露伴が明治二十三年に発表した「対髑髏」の第一章に見える一節である。当時の文語体文章に挿入されたこの句は、俳句の挿入とは思えないほど原文に融け込んでいる。露伴は若いころから旅が好きで、この「草まくら」の処女句を得た陸奥の旅に次ぎ、明治二十一年には、大晦日からの雪の木曾路の旅に出ている。「露團々」の稿料が手に入ったからである。その折の旅中吟が、

木曾路にて

酔狂の旅をいさむる吹雪かな

牛の角に藁巻きそへよ木曾は吹雪

である。更に当時の作に、

大阪の在にて



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook